

シンフォニック・カペレ

ロシア国立交響楽団

ロシア交響曲の 二大巨塔!

ショスタコーヴィチ

交響曲第5番「革命」

チャイコフスキー 三大交響曲

交響曲第6番「悲愴」

“赤いカラヤン”

指揮

ヴァレリー・ポリャンスキー



2019
7/21
(日)

13:00開演
(12:15開場)

愛知県芸術劇場コンサートホール

S席 ¥11,000 A席 ¥8,000 B席 ¥6,000 学生券 ¥2,000

学生券

ご希望の方は中京テレビ事業ホームページ<https://cte.jp/>よりエントリーしてください。
公演1ヶ月前に抽選の上、お席をお取りできるか否かを登録メールアドレスへご連絡いたします。

チケット販売所

中京テレビ事業 チケットセンター ☎052-320-9933 <https://cte.jp/>

チケットぴあ:0570-02-9999 (Pコード:139-580) ローソンチケット:0570-084-004 (Lコード:45381)

愛知芸術文化センターPG:052-972-0430 栄プレチケ92:052-953-0777 e+(イープラス):eplus.jp 名鉄ホールチケットセンター:052-561-7755

楽天チケット:<http://r-t.jp/> セブン-イレブン、ローソン、ミニストップ、ファミリーマート店頭

主催: **50**th
CHUKYO TV

公演に関するお問い合わせ

中京テレビ事業 ☎052-588-4477 (平日10:00~17:00 土・日・祝休業)

※出演者・曲目等変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。
※未就学児のご入場はご同伴の場合でもお断りいたします。

ロシア国立交響楽団 × ヴァレリー・ポリャンスキー

2015年7月の初来日では度肝を抜く「チャイコフスキー第4・5・6番連続演奏」を取行し、各地絶賛のなか大成功のデビューを果たす。抒情溢れる美しい旋律、激しく躍動する音楽はこのオーケストラの身上。激情あふれる“爆炎型”の指揮ぶりから「赤いカラヤン」の異名をとるポリャンスキーの指揮によりお贈りします。今回はショスタコーヴィチ「革命」とチャイコフスキー「悲愴」という、通常あり得ない超弩級のプログラム。

唸る弦楽器群、咆哮する金管…ロシアの叫び。ロシア音楽の真髄をたっぷりと。

体制への反逆者・抑圧と悲劇の
作曲家ショスタコーヴィチが放った
起死回生の作品!

「革命」



「革命」の名で親しまれている交響曲第5番は、1937年、ロシア革命20周年を祝う演奏会で初演された、旧ソ連の作曲家ショスタコーヴィチの作品の中でも最も人気の高い作品の一つです。

危険と隣り合わせの作曲活動

当時のソ連はスターリンにより社会主義の名のもとに恐怖政治が行われていた時代であり、作曲家たちは作品を検閲され、その作品が政治的に問題ないか厳しくチェックされていました。ショスタコーヴィチも例外ではなく、28歳で発表し人気を得ていたオペラ「ムツェンスクのマクベス夫人」の“権力への抵抗”というテーマが「荒唐無稽のオペラ」として厳しく非難され、体制への反逆者として見られるようになってしまいました。

「大粛清」により近親者や友人たちも次々と投獄・処刑されていたショスタコーヴィチ自身も当局に事情聴取を受けており大変危険な状況の中、名誉挽回のために書いた起死回生の勝負作が「交響曲第5番」なのです。

大成功を取めた交響曲第5番

古典的で比較的わかりやすい音楽として作曲された第5番は、ベートーヴェン風の英雄主義的な音楽性が「社会主義リアリズムの傑作」として高く評価されました。ショスタコーヴィチはこれ以降名誉を回復し、再び『人民のための芸術家』としての道を歩んでいくこととなります。

曲の構成

古典的な4楽章で構成されており、悲痛な第1楽章からはじまり、間奏曲的な第2、3楽章を経て、壮大な二長調のクライマックスを築く第4楽章を結論とする、「暗から明」の流れを持ちます。第3楽章ではショスタコーヴィチしか書けないような非常に冷たく暗い、「鉛色の空の下、悲しみを背負って日々の暮らしを淡々と生きる人々」を連想させ、最後はまるで苦悩からの勝利を願うかのような長調で締めくくられます。4楽章では激しい闘争の後、再び不安な旋律へ…そこを抜けると、静かで暖かい旋律があり、民衆が苦難を乗り越えて新しい国家のもとで幸せになる姿が描かれます。

苦悩からの勝利なのか、苦悩の中の強制された勝利なのか…。

ショスタコーヴィチがどのような想いをこの交響曲第5番「革命」に込めたのか…思いを馳せながらお聴きください。

チャイコフスキー最後の大作にして
最高傑作! 不安と苦悩、気高さと諦念、
うずまく魂の慟哭

「悲愴」



ロシアを代表する作曲家チャイコフスキーにより1893年に作曲された交響曲第6番は、第4番・第5番と共に「三大交響曲」として親しまれています。

最後の交響曲第6番は、チャイコフスキー自身の指揮による初演の際、「悲愴」という副題はプログラムに記載されておらず、聴衆の反応も新聞の批評も芳しくありませんでした。初演の2日後、チャイコフスキーは「悲愴」というタイトルを付けて出版するよう指示し、数日後、急死します。彼の死因には諸説ありますが、作品と彼の死の因果を感じずにはられません。

チャイコフスキーの葬儀の直後、最後の大作として再演され、その時になって聴衆は、この交響曲にうずまく苦悩と魂の慟哭に打ちのめされ、号泣し、喝采したといえます。

チャイコフスキーがこの曲に封じ込めた情念は果たして何だったのかは未だに謎のままですが、彼の性的マイノリティとしての葛藤や苦悩、社会情勢の混沌など、多くの苦衷を感じ取れずにはられません。

ロシア音楽一大巨塔交響曲
一度に聴ける超弩級のプログラム